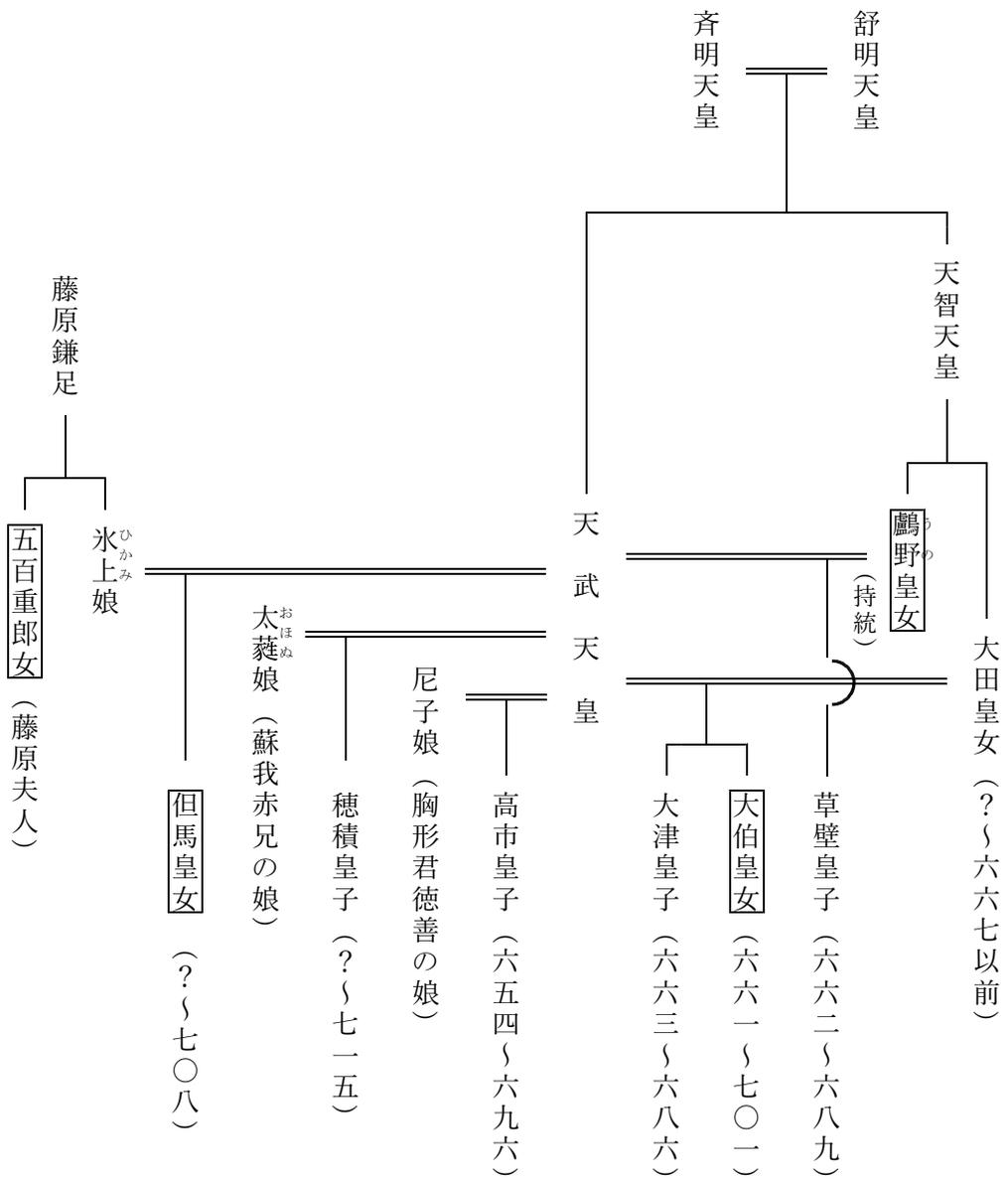


# 大伯皇女と但馬皇女を中心に

北川和秀

西暦	年号	天皇	先皇	執政	事項
六六一	齊明	齊明		中大兄皇子	大伯皇女誕生。熟田津の歌。齊明没
六六二	天智			草壁皇子誕生	草壁皇子誕生
六六三	元				大津皇子誕生。白村江の戦い
六六四	二				
六六五	三				
六六六	四				
六六七	五				
六六八	六				これ以前大田皇女没、大伯7歳、大津5歳
六六九	七	天智			天智即位。蒲生野に遊獵
六七〇	八				藤原鎌足没
六七〇	一				天智天皇没
六七二	元	天武			壬申の乱。飛鳥浄御原宮に遷都
六七三	二				天武天皇即位。大伯皇女伊勢齋宮13歳
六七四	三				大伯皇女、伊勢下向14歳
六七五	四				
六七六	五				
六七七	六				
六七八	七				
六七九	八				
六八〇	九				吉野行幸、吉野の盟約
六八一	一〇				草壁皇子立太子20歳
六八二	一一				
六八三	一二				大津皇子朝政に参画21歳
六八四	一三				
六八五	一四				
六八六	元	天武			天武天皇没。大津刑死24歳。大伯帰京
六八七	二				
六八八	三				草壁皇子没28歳
六八九	四				高市皇子太政大臣
六九〇	五				
六九一	六	持統		高市皇子	
六九二	七				
六九三	八				
六九四	九				藤原宮に遷都
六九五	一〇				



七〇九〇	七〇八八	七〇八七	七〇八六	七〇八五	七〇八四	七〇八三	七〇八二	七〇八一	七〇八〇	六九九九	六九九八	六九九七	六九九六
和銅				慶雲		大宝			文武				
三	二	元	四	三	二	元	三	二	元	四	三	二	元
元明									文武				
							持統						
石上麻呂				御主人			阿倍		多治比島				
3月平城遷都				6月文武天皇没。7月元明天皇即位 改元。但馬内親王没。			大宝令を施行。大伯内親王没41歳 持統上皇没			2月軽皇子立太子。8月文武即位		高市皇子没	

【藤原夫人】

天皇、藤原夫人に賜ふ御歌一首

①わが里に大雪降り大原の古りにし里に落らまくは後(二・一〇三)

藤原夫人、和へ奉る歌一首

②わが岡の霏に言ひて落らしめし雪の摧けし其処に散りけむ(一〇四)

藤原夫人の歌一首

明日香清御原宮に天の下知らしめしし天皇の夫人なり。字を大原大刀自といへり。即ち新田部皇子の母なり。

③霍公鳥いたくな鳴きそ汝が声を五月の玉にあへ貫くまでに(八・一四六五)

【大伯皇女】

A. 天皇、有司に命せて壇場を設けて、飛鳥浄御原宮に即位す。正妃を立てて皇后とす。后、草壁皇子尊を生れます。先に皇后の姉大田皇女を納して妃とす。大来皇女と大津皇子とを生れませり。(天武二・二・二七) 673

B. 御船西に征きて、始めて海路に就く。(齐明七・一・六) 661

C. 御船、大伯海に到る。時に、大田姫皇女、女を産む。仍りて是の女を名けて、大伯皇女と曰ふ。(同八日)

D. 天豊財重日足姫天皇と間人皇女とを小市岡上陵に合せ葬せり。是の日に、皇孫大田皇女を、陵の前の墓に葬す。(天智六・二・二七日) 667

E. 大来皇女を天照太神宮に遣侍さむとして、泊瀬齋宮に居らしむ。是は先づ身を潔めて、稍に神に近づく所なり。(天武二・四・一四) 673

F. 大来皇女、泊瀬齋宮より、伊勢神宮に向でたまふ。(同三・一〇・九) 674

G. 天淳中原瀛真人天皇崩りましぬ。皇后、臨朝称制す。(朱鳥元・九・九) 686

大津皇子、竊かに伊勢の神宮に下りて上り来ましし時の大伯皇女の御作歌二首

①わが背子を大和へ遣るとさ夜深けて暁露にわが立ち濡れし(二・一〇五)

②二人行けど行き過ぎ難き秋山をいかにか君が独り越ゆらむ(二・一〇六)

H. 皇子大津、謀反けむとして発覚れぬ。(同年・一〇・二)

I. 皇子大津を詔語田の舎に賜死む。時に年二十四なり。(同三日)

J. 伊勢神祠に奉れる皇女大来、還りて京師に至る。(同年・一一・一六)

大津皇子薨りましし後、大来皇女伊勢の齋宮より京に上る時の御作歌二首

③ 神風の伊勢の国にもあらしをなにか来けむ君もあらなくに(二・一六三)

④ 見まく欲りわがする君もあらなくになにか来けむ馬疲るるに(二・一六四)

大津皇子の屍を葛城の二上山に移し葬る時、大来皇女の哀しび傷む御作歌二首

⑤ うつそみの人にあるわれや明日よりは二上山を弟世とわが見む(二・一六五)

⑥ 磯のうへに生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君がありと言はなくに(二・一六六)

右一首、今案ふるに、移し葬る歌に似ず。けだし疑はくは、伊勢の神宮より京に還る時、路のへに花を見て感傷哀咽してこの歌を作るか。

K. 大伯内親王薨しぬ。天武天皇の皇女なり。(大宝元・一二・二七) 701

#### 【石川郎女】

大津皇子、石川郎女に贈る御歌一首

① あしひきの山のしづくに妹待つとわれ立ち濡れぬ山のしづくに(二・一〇七)

石川郎女、和へ奉る歌一首

② 吾を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくに成らましものを(二・一〇八)

#### 【但馬皇女】

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時に、穂積皇子を思ふ御作歌一首

① 秋の田の穂向の寄れること寄りに君に寄りなな事痛かりとも(二・一一四)

穂積皇子に勅して近江の志賀の山寺に遣はす時、但馬皇女の作りましし御歌一首

② 後れ居て恋ひつつあらずは追ひ及かむ道の阿廻に標結へわが背(二・一一五)

但馬皇女、高市皇子の宮に在す時、窃かに穂積皇子に接ひて、事すでに形はれて作りましし御歌一首

③ 人言を繁み言痛み己が世に未だ渡らぬ朝川渡る(二・一一六)

【持統天皇】

天皇の御製歌

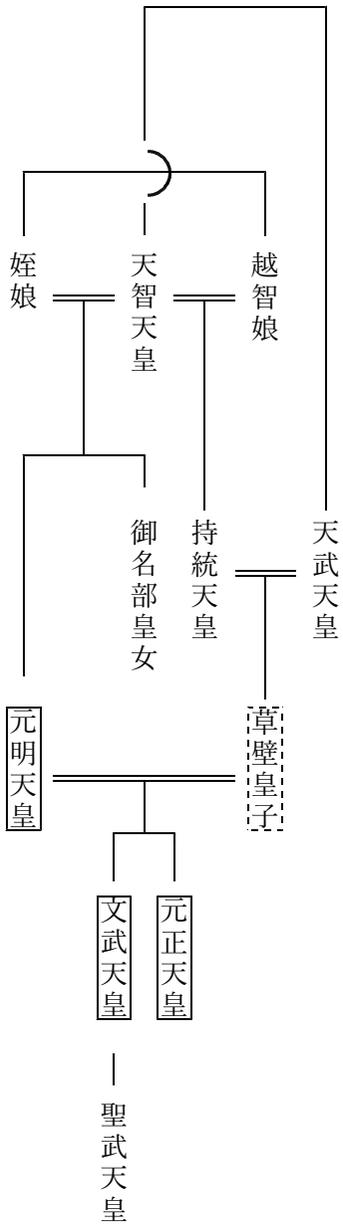
①春過ぎて夏来るらし白栲の衣乾したり天の香具山（一・二八）

《参考》

・ 勅を奉りて始めて元嘉暦と儀鳳暦とを行ふ。（持統四・一一・一一）

【元明天皇】

A. 天皇大極殿に即位きたまふ。（慶雲四・七・一七）



B. 慶雲五年を改めて和銅元年として御世の年号と定め賜ふ。（和銅元・一・一一）

和銅元年戊申天皇の御製

①ますらをの鞆の音すなりものふの大 臣楯立つらしも（一・七六）

御名部皇女の和へ奉る御歌

②わご大君物な思ほし皇神のつぎて賜へるわれ無けなくに（七七）

和銅三年庚戌の春二月、藤原宮より寧楽宮に遷りましし時に、御輿を長屋の原に停めて廻かに古郷を望みて作る歌 一書に云はく、太上天皇の御製といへり

③飛鳥の明日香の里を置きて去なば君があたりは見えずかもあらむ 一に云ふ、君があたりを見ずてもあらむ（一・七八）